

民話の語りの専門家による

私は自分では〔語りの〕才能があると思っている。何故なら、物語る才能はみんなに与えられているわけではないからね。勿論、みんな語ることは出来るし、語るにはそれぞれのやり方があり、また聴き手を物語の中に運んでいくやり方もある。というのも、物語というのはまさしくひとつの旅であって、ひとつの夢なのだから。それでも私には才能があると思っている。

私は出来る限り、祖先たちの物語、おばあさんやおじいさんの話をそのまま伝えようとしてきた。それから、その後で今度は自分で、自分の物語を書きたいと思った。それが始まったのは、私が娘を持った時で、子供たちのために書きたくなった。どうしてもレユニオンを舞台とする物語を書かなくてはいけないという訳ではなかったので、レユニオンの物語を書いたのはずっと後になってからだった。でも、語りという点については、15年の間、レユニオンを舞台とする物語を語っている。

それと同時にやったのは、アフリカやインド、それにアラブ（チュニジア人だったと思う）の語り手たちと一緒に仕事をするということだった。その結果、この混合チームの仕事から、物語たちが旅をしてきたということ、それから、殆ど同じ物語が存在するという事に気付いた。勿論、登場人物は代わっているし、背景も代わっているけれど、物語が人間と共に旅を同じように旅をしたのだとわかったのは事実。旅をして、その後でその要素の順番を変えたり、飾りつけたりして、我々のところに今あるというわけ。つまり、普遍的な基盤があるということになる。違ったやり方で書かれるにしろ、語られるにしろ、何か共通のもの、人間的なとか普遍的な土台があり、テーマは同じものになっている。

私は専ら子供たちのために語っているが、大人にも語ることもある。大人にしか語らない語り手とは逆に、私は大人に語ることも始めた。それは子供に長

い間語ったずっと後のことだった。大人用に物語を脚色すること、また大人用の物語を子供用に再び脚色することには大変苦労した。だって、ことばも単語も同じではないからね。そう、物語に手を加えなければいけないことになる。それで私は自分の物語を描き始めたのだけれど、ずっと押し入れに入ったままで、いつ日の目を見るかわからない。いつかはまとめて出そうと思っているし、そのつてもある。でも、いつも「いつ出すの？ どうして出さないの？」と言われてる。本当のところ、もう長い間出そうと思えば出せたのだけれど、私にはそれに対する拒否反応がある。拒否反応というのは、私にとって、物語というのは口頭伝承だし、口承であるべきだということ。だから、物語を書くと公言するのは気持ちよくないし、それは物語を多少なりとも変質させてしまうことになる。この魔法のようなものすべてをね。口承性の中に見出すものは何であろうと、書かれた物語の中ではいずれにしても再び見出すことはない。でも、私は、物語というのはクレオール語とまったく同じで、進化し、消え去るものだと思っている。そうでしょう。消えようとしているものというわけ。それらの物語がすべて消えてしまうのはとても残念だし、私が特に子供たちに語っているのは、伝えるためでもある。私に伝えられたのと同じように、子供たちが後になって、物語を語り続けるようにと。私は子供たちに語る時には、最初に、これは彼らと交換っこをしているのだと説明している。というのも子供たちは時々、何で物語を彼らに語るのかがわかっていないから。彼らは「本があるし、テレビもあるのに．．．」と言うので私は説明する。「そうね、本もあるし、テレビもある。でもこれは同じものじゃないの」。「それに、本がなかったり、テレビがなかったりする時もあるでしょう」。それで彼らは、本を読むことと、語り手が目の前にいることの違いがわかってくる。目の前に語り手がいる時、物語を聴く時、人はその中にいるというか、その中に入り込むことになる。本の場合は、その中に入る込むことはない。物語はまた、聴くことは参加することにもなる。

私は対話型の物語を多く語っているけれど、そこでは聴き手が物語の中に入

り込む。例としては、お囃子のようなものがあって、ちょっとした言葉で聴き手が参加せざるを得ない一瞬がある。例えば、ここレユニオンで用いているのが有名な「クリケ クラケ」で、これは物語を始めるため、そして雰囲気を整えるためのもので、聴き手に物語に入り込む用意をさせる。マジシャンが「アブダカダブラ」というのと同じようなもので、観衆にちょっとした準備をさせる。マダガスカルでは「アンガン アンガン アリナ アリナ」というのがある。

先ほど言ったように、物語は旅をするけれど、みんなこのような最初の決まり文句があって、それが我々の言葉に適用され、語り手はみんな、物語を始める時にこの決まり文句を使うことになる。つまり、彼らは最初に舞台を設定し、聴き手と少し遊んで、聴き手がこの決まり文句を記憶する。また、この決まり文句は、物語を語っている間に、聴き手の中の誰かがちょっと離れて聴いていないような時に、「クリケ」という文句に戻り、聴き手側が「クラケ」と答えることで、脱落した人を戻らせるのにも使える。それにまた、物語にリズムを与えるのにも役立っている。物語を語る時には声の調子を変えることもあるし、沈黙もあって、ずっと語っているわけではない。黙っている時には、身体が何かを表している。口によってでも言葉によってでもなく。また、あの決まり文句は一方で、リズムを崩すことにも役立っている。

物語のテーマという点では、我々のところには非常に特徴的な登場人物がいるが、すべてのクレオール民話では、それが物語であろうと伝承であろうと（何故なら登場人物自体が伝承の一部となっているので）共通している。ということで、「カル婆さん」は物語にも伝承にも登場する。「チジャン」と「大悪魔」も同様に、物語にも伝承にも登場する。この3人が主な登場人物となっている。「カル婆さん」「チジャン」と「大悪魔」。私は実は、登場人物についてまだ掘り下げているところで、書かれたものとは違うものを幾つか見つけている。それはまだ存命の人たちについて私が聴き取った物語なので、もっと井戸を掘りあてる機会があるかも知れない。

それらの語りは記録していない。と言うのも、どうしてもということではなかった。でもちゃんと私の頭の中に記録してあって、保存している。つまり、登場人物には、「チジャン」「カル婆さん」「大悪魔」に加えて、古い人々も含まれるということになる。実際、「カル婆さん」は元奴隷だった。彼女は、或る父親が小さな一人娘のために、人形や車を贈るように買われた奴隷で、少女時代を農園で暮らし、同じく男の奴隷に恋をする。その男の奴隷はある時、脱走して逃亡奴隷に加わり、命を落とすことになる。それで彼女は気が狂ってしまい、池に身を投げる。彼女はそうやって死んだのだけど、それについて私は、彼女が死んだ時には身重だったと思っている。その後で、色々なバージョンが出てきた。こういう風にして言い伝えというのが出来るわけで、それに何でも付け加えて語ることになる。そこで、彼女は自殺した時に身重だったということで、そこから「カル婆さん」の伝承が生まれた。

「カル婆さん」は自殺した場所にとり付いていると言われていたが、同様に、彼女は島の全体にとり付いている。それは子供を求めてであり、子供に腹いせをしている。というのも、彼女自身は自殺をしたので、子供を持って育てる機会に恵まれなかったから。そこから言い伝えが生まれることになる。「カル婆さん」はその結果、子供を害すると言われていた。彼女は子供を殺し、子供を食らい、子供をさらい、そうして魔女となる。言い伝えはまさにそこから生まれ、物語が彼女のことを語り、幻想がまさってくる。「カル婆さん」はマーヴェルに、島の南部でここからそれほど遠くないところに住んでいたと言われていた。カブリ [山羊] の峡谷の上に入ったら、そこは茂みで洞窟がある。その中に誰かが入ったら二度と出て来れない。これが言い伝えというわけ。それから、夜に誰かが死ぬ時、「カル婆さん」の笑いが聞こえると言われていた。それは彼女が魂を迎えに来るからだということだけれど、必ずしも子供の魂だけではなく、大人でも子供でも誰でも同じ。ただ、子供がどうのこうのという話自体、元々は言い伝えの一部ではなく、後から物語に付け加えられたと見る

向きもある。母親が我々に伝えたものは、その若い女性の物語と同一ではなく、主人公は老女で、死んでから魂が彷徨っている。そして、誰かが死のうとしたり、病気で死にかけていると彼女は喜ぶ。病人が回復すると彼女は泣く。その人の魂を取れないから。本当かどうかはともかく、そのような話がうちでは伝えられていた。

これらの3人の登場人物以外には、「カル婆さん」に姉妹がひとりいて、ミサルダという名前だったという人もいる。でも、私とその登場人物に出逢ったのはひとつかふたつの物語の中だけでそれ以上はわからない。名前の由来もわからないけれど、言い伝えからではなく、物語の中で名付けられたのだと思う。とにかく、いずれにしても少しは信憑性があるはずで、それは言い伝えとして存在していることから窺える。一方、物語としての成立については、敵対関係の話だと思うけれど、実際にはよくわかっていない。彼女は「カル婆さん」よりも悪人なので、まさに私が次に扱う登場人物はこの姉妹になる。子供たちは「カル婆さん」が悪人だったことは知っているが、彼女よりももっと悪い姉妹がいたとなると、どうなることか。これは、ヒンドゥー教の三人の女神を想起させるが〔カーリーの三相〕、一人は聖母マリアに類似していて、もう一人は生首の首飾りを持っていて件の姉妹にとてもよく似ている。3人目は余り知られていないが、他の二人ほど黒くはない。

それから幽霊というのがある。幽霊たちは彷徨って、旅までする。多分、幽霊というのはでっち上げられた登場人物だと思うけれど。シラオスでは「ナム・キュイキュイ」の物語がある。チジャンに似てはいるけれど、チジャンではない。その話は普通〔シラオス以外では〕、少年の父親が救われて終わるけれど、「ナム・キュイキュイ」が父親の方をおびき出して、父親が「カル婆さん」に食べられてしまう。山の上の方では「カル婆さん」ではなくて、悪魔ということになっている。これはアフリカ民話に類した物語で、レユニオンにやって来たものだと思う。そして、レユニオンに入った時に「ナム・キュイキュイ」の名前が残ったり、或いはチジャンに変えられてしまったということだろ

う。

特徴的なのは、イレット・ア・コルドの下、つまりイレット・デ・ソングジュに住んでいる人たちのお話で、そこは本当に小さなイレット（集落）で、住んでいるのは白人（yab）なんだけれど、混血なのは確かだと思う。その物語は奇妙な、身重の妻の話で、語ったことがあるけれどアフリカ起源の民話かどうかは覚えていない。

その話というのは、或る女性が妊娠して、喉が渴いていた。身重の女性というのは何しろ色々欲しがらるもので、彼女は真夜中に喉が渴いた。そこで夫が水を持ってきたけれど、彼女が欲しいのはそれではない。彼女は水が欲しいのだけれど、水なら何でもいいというわけではない。クレオール民話のヴァージョンでは、彼女が欲しいのは、カエルが入っていない水。彼女の夫は「それは無理だ」と言ったけれど、余りにしつこくて、夫はこのままでは寝かせてくれないと思い、真夜中に彼は、カエルが入っていないまともな水を探しに出かける。真夜中に出かけて彼はいろんな物音を聞いたり、得たいの知れないものを感じる。彼は三つの川の前に行くが、一つ目と二つ目の川は何かおかしいので通り過ぎて、三つ目の川に行く。そこで彼は耳を澄まして、そこにはカエルがいないことを知る。そこで彼は、妻のところに持っていくべく水をカップに満たす。彼はその川が既に呪われていたことに気づく。というのも、彼がカップを沈めるや否や、彼は家にいることに気づいたからである。その時から彼は気がふれてしまった。一方の妻はと言うと、水を飲んでとてもおいしいことがわかり、彼女は川にまた行く。彼女は水を求めて探し、カル婆さんの手に落ちる。そしてカル婆さんは彼女に言う：「罰だよ、私の水を盗みに来たのだからね。お前の一番大事なものをもらうことにするよ」。妻は答えた：「お願いします。貧乏なので何も持っていません」。カル婆さんは続ける：「いや、お前はとても価値のあるものを持っているよ」。そしてカル婆さんはこう言った：「数年したら戻ってくるので、お前は息子を渡すのだ」。彼女は、例のナム・キュイキュイを身ごもっていたのだった。彼女は自分には選択がないことを知ってはいた

が、カル婆さんに息子をやりたくなかった。食べられてしまうからである。そこで彼女は毎回カル婆さんをだまして言った：「明日来てください。明日お願いします」。そうこうするうちに、ナム・キュイキュイはひとりの老婆に逢った。この老婆というのが、私の聞いたヴァージョンでは、カル婆さんの姉妹で、子供を食べようとするカル婆さんの邪魔をしようとする。そういうわけで、彼女はカル婆さんを厄介払いするために、ナム・キュイキュイ、或いはチジャンを助けるのだけれど、それは後で食べるためにそうしているに過ぎない。彼女は老婆に変身して、彼の耳に語りかける時にいつもこう言う：「心配しなくていい、もしカル婆さんがお前を探しに来たら、自分の頭を搔けばいい。それでお前の望むものはすべて手に入れられるだろう」と。また、カル婆さんの姉妹はこうも言った：「心配しなくていい、お前は小さな仲間たち皆に、誰かがやって来てチジャンはどこだと尋ねたら、皆が指を上げて、《僕だよ》、《僕だよ》と言わせればいい」。そしてとうとうカル婆さんがやって来て、誰がチジャンかを尋ねた、すると皆が「僕だよ、僕だよ！」と、女の子もばあさんまでもが言ったので、カル婆さんは怒って去って行った。二度目に来た時に〔チジャンの〕母親を見つけると、母親はこう言った：「明日来て下さい。明日チジャンはおじいさんと一緒にサトウキビ畑に肥料をやりに行きます。その時にあの子がひとりきりになれば、食べられるでしょう」。そして翌日戻って来る際に、カル婆さんの姉妹が耳元でチジャンにこう警告する：「気をつけるんだ、気をつけるんだ、カル婆さんがまた来るよ」。そしてチジャンは言う：「じゃ僕はどうすればいいの?」。そして彼は頭をかく。すると彼女が言った：「心配することはない。頭をかくんだよ。そうしたらお前はカメレオンに変身する」。そうして彼が頭をかくとカメレオンに変身した。それで彼はサトウキビ畑を横切って、母親が彼に昼食として用意したものを食べに行くことができるようになり、さっとサトウキビ畑の中に入っていった。カル婆さんはまたも見つけられなかった。彼女が三度目にやって来るのが、まさしく例の〔さっき話した〕三回目で、カル婆さんの姉妹が相変わらず耳元で彼にこう言う：「今度

は、今夜あいつがお前を食べにくる。お前はあることをしないとイケない」。彼は頭をかき、耳の中の声は続けた：「よくお聞き。心配しなくていい。お前に魔法の粉をあげよう。それをエンドウ豆のカレーに入れるんだ。それを食べたらみんな眠るだろう、お前は食べちゃいけないよ。みんなが眠ったら、お前はみんなの頭を剃るんだ。お前の頭もだよ。ただ父親の頭だけはそのままだ。お前は父親のベッドに入り、父親をお前のベッドに入れるんだ」。そういうわけでカル婆さんが夜にやってくる。彼女はみんなの頭を触って、剃られていない唯一の頭がチジャンだと思うが、それが実は父親で、彼女は父親を食べてしまう。

これはかなり象徴的で、私はこの物語を語る時、聴き手を選んでいく。つまり、話しに行く場所や聴き手の階層、つまり語りの環境によって。父親の立場が何とも言いようがないので。この物語はあまり語る気がしない。それでも語る時は、結末を変えるようにしている。いずれにしてもハッピーエンドで終わるようにしている。結局のところ、鬼の話と似ていて、鬼の腹を割くという話と同じようなものだ。

しかし、自分のちょっとした直観だと、何かある。シラオスについては、あそこは白人の世界と言える。彼らが混血であったにしても、或るいはマダガスカル人やインド人との混血であったことを忘れてしまったにしろ。私が思うには、あそこではカル婆さんの話はなくて、むしろ大悪魔の話がある。但し、カル婆さんのことをシラオスの人々が知らないというわけではなく、イレット・デ・ソンジュ（夢の小島）では知られている。それがカル婆さんであるにしても、それは買われた女奴隷であり、しかも白人に殺された云々という話になっている。だから、復讐と言っても、その父親というのは本当の父親ではなく、結局のところ、奴隷の子供の本当の父親は白人、つまり雇い主ということになる。

父親の方が食べられてしまうという話の場合、しかも父親を差し出すのが子供であるというのは象徴的であると言える（ともかくもそれは一種の償いであ



るから)。それでも、父親を差し出すというのは実にインパクトが大きく、暴力的でもあり、これは我々の歴史に対応しているのだと思う。シラオスの高地では、人々はカル婆さんについて話す、それはミズナギドリの鳴き声を聞いた時に彼らにとってそれがカル婆さんであるということになる。しかしシラオスの人々がすべてランド・キューイ＝キューイを知らないわけではない。アフリカ民話ではナム・キューイ＝キューイであるけれど。アフリカ人たちがナム・キューイ＝キューイをどのように定義しているかが鍵になると思う。オリジナルの民話は多分ナム・キューイ＝キューイであるけれど、物語は移動するので、それぞれ少し異なるバージョンがある。それを人々が物語っているということだけで充分ではある。尤もそれを語ったのは二人の女性であって男性ではないということは問題になるが。シラオスのような高地とここ平地では、その理由もさることながら、生活様式そのものも異なり、シラオスが隔絶しているということも関係している。つまり世界の見方が同じではない。シラオスでは長い間灯りがなかったということもある。本当に何もなかった。それで彼らは恐怖や不安を抱き、また純然たるカトリックの影響もあり、物語の唯一の登場人物が「大悪魔」だった。それからカル婆さんがいるが、それは奴隷制を暗示している。とにかく高地の人々は白人の末裔なのでカル婆さんが出て来る。

いずれにしても、高地であれ平地であれ、人はそれほどカル婆さんの「物語」を知っているわけではなく、ミズナギドリの鳴き声に帰されている。サン＝ポール [平地] でも、ミズナギドリの鳴き声のことを語っていて、「それは何ですか？」と言うと、彼らはそれが「カル婆さんだ」と答えるのでどうにもよくわからない。ところで、シラオスでは、所謂「民話」というものがない。あるのは、断片的なものでナム・キューイ＝キューイの話をしてくれた二人の女性を除けば、殆ど無きに等しい。それに数少ないそれらの話も、幽霊やさまよう魂を見たというものしかない。言うなれば、あそこのような僻地では開けた地平がないということだと思う。タブカルというところだけは例外だけれども。それらは思うに、壁に反響するこだまのようなものだと思う。彼らのものの見方や

死に対する考え方も同じようなものであって、彼らが幽霊と呼ぶものも、彼らが持つ、彼ら自身のビジョンの反映だろう。他にも、彼らの祖先は元々フランスの奥部から来た人々で、フランスのそういう田舎の地方では、幽霊は現実のものだった。だから、そういうわけで祖先たちは、隔絶された高地に逃れることで、末裔の彼らにそういうものを伝えたということはある。結局のところ、そういうものは田舎の伝統から生まれたものなのだから。